



大学入試制度をどうするのか？ —新テストと受験機会複数化をめぐって

小 高 忠 男

1. いいわけ

この小論を“生産と技術”誌に掲載して戴くのが適当かどうか、原稿執筆に着手した今もまだ迷っています。しかし、“高度技術社会”における“生産と技術”の担い手たる人材を養成しているのは“なんてったって大学”であり、最近の世間、とくに、社内教育態勢の整備された企業では、大学生の躰けの悪さに業を煮やして『大学無用論』を唱えて八つ当りなさる向きもあるようですが、ここ当分の間、人材養成の核は“大学”であり続けるでしょう。そうなれば、大学で手塩にかけて教育するにふさわしい学生を選び出す手続きが“大学入試”と言うことですから、“風吹けば桶屋”式論法ですが、本誌に寄稿させて戴くのもあながち見当外れではあるまいと思う次第です。

2. 今、何が問題なのか？

しかし、“選別したからには卒業させよう”と言う現在の『大学入試・教育』の在り方には私は大いに疑問を感じています。大体、人間の能力・適性などと言ったものは自分自身にも良く分らないものですし、まして、“マークシート方式”の共通一次テストや一発勝負の入学試験で分ろう筈もありません。にも拘らず今では多くの若者にとって“大学入試”は人生の“究極の目標”のようにすら見えます。こんなことを言うと“教育ママ”の皆さんに叱られるかも知れませんが、“一流大学合格と言う人参”を鼻先にぶら下げられて、小・中・高校12年間を通じて鞭を当てられ続けて来た馬は、人参にありついたらたん“もうこれ以上鞭はご免”と言うわけで、大学はレジャーランドも同然、勉強

はほんの“サンドイッチに添えるパセリ”と言った所です。かてて加えて、世間、とくに、マスコミは“講義が面白くないから、単位を取らない”などという“遊眠学生”を真に受けて大学をあてこする始末です。冗談ではありません。“学問に王道なし”と言うのは先哲の言葉です。まして“学問に遊歩道はない”のです。(急いで付加えますが、勿論、勉学や研究に自発的に打ち込む意欲に満ちた優れた学生がいないうけではありません。近頃はとみに少なくなりましたが、そんな学生に出会うのは大学教師の大きな楽しみの一つです。)

受験生が大学を選ぶのは“自分は何が勉強したいから”と言うのではなく、“この偏差値なら”とか、“週間誌にも名前が載って格好が良い”と“まわり”が勧めるからと言うようなことのようにです。某々大学の定員100名そこそこの医学部進学課程に某々進学校から何十人もが合格するのはどう考えても異常です。優れた医者になるのに“偏差値”が高い必要はありません。また、医者になる適性を持った若者がそんなに一箇所に集中している筈もありません。しかし、大学側の悩みは“それなら偏差値の低い人間の方が医者にふさわしい”とも言切れないことです。やはり、“手間暇かけて選別したからには、何が何でも卒業させる”と言うよりも“なるべく多くの若者にチャンスを与えて、手塩にかけて教育しながら選別する”大学教育の態勢を整備することが急務です。

3. 共通一次で何が変わったか？

日頃の思いの丈を言っているうちに、話が本題から反れました。本題に戻しましょう。

準備に8年もかけた『共通一次試験』の不成功は“二次試験で各大学が特色を出そうとしなかった”ためであると、大学の怠慢がスケープ

*小高忠男 (Tadao KOTAKA), 大阪大学, 理学部, 高分子学科, 教授, 工学博士, 高分子物理学

ゴートにされております。その傾向が無かったとは言いませんが、我々にとって空しかったことは、『一期校・二期校制度』の弊害を除くために『二期校の廃止』に代えて導入された筈の『共通一次試験』が、予想した通り、受験産業による全国規模の『模擬試験』を税金で代行する結果となったことです。また、“同一尺度での偏差値情報”が集積された結果、受験者の進路決定の際、試験の結果が“受験生の輪切り”に使われることになり、大学で実施する二次試験は“輪切りの中での選択”に過なくなってしまうことです。

しかし、この制度によっていわゆる受験生の“国公立離れ”を惹き起して私立大学にも優秀な学生が集まるようになり、官学偏重の我国の大学制度に風穴を明ける結果になったことはたくまざる功績と言うべきでしょう。一方では、東大を頂点とする“国公立大学の序列化”が進み、全国公立大学が特色を失い、我が阪大ですら氣力に溢れた学生を失いつつあることは、自業自得とは言え誠に耐え難い程です。

4. 『新テスト』で改善出来るのか？

これらの欠陥を改善するため、『受験機会の複数化』を目指して、いよいよ、来春から『A・B日程グループ分けによる入学試験』を実施することになり、また、『共通一次試験』に代る『新テスト』の構想（文部省大学入試改革協議会4/21中間まとめ）が国大協でも議論されて、64年度実施を目指して準備に入りました。

『受験機会の複数化』の問題は後でふれることにして、伝えられる『新テスト』の構想を見ると、その内容には『共通一次試験制度』改革に向けた並々ならぬ熱意は感じるものの、その構想具体化の方策がまるで無いのに驚きます。

例えば、高等学校における進路指導の改善のためとして、“高等学校における進路指導が偏差値尊重、業者テストの利用等に陥らず、各大学の学部等の教育の目的・内容等に関する十分な知識と情報に基づき、各人の個性、適性、進路に応じたものとなるよう改善充実を図るべきである”とあります。誠にその通り。しかし、今、聞きたいのは“べきである”と言う訓示で

はなくて、“改善充実がどうしたら実現出来るか？”と言う具体策です。一方、試験を受ける側にしてみれば、自分達にはさしたる相談もないままに『大学入試制度』を“朝令暮改”式にいじくりまわされ、“受験産業依存”を余儀なくさせられているのが現状です。

提案されている『新テスト』が『共通一次試験』と具体的に違う点は煎じつめると“新テストに係る統計数値がいわゆる輪切りや大学の序列化等に利用されないよう、統計数値は公表しない”また“受験生個人への試験結果の通知は行わない”ことに尽きるようです。

我々の意図に反して、この種の“横並び一線式”のテストの結果が“輪切り”に利用されたことは『共通一次試験』の苦い経験です。情報処理システムの発展した今日“統計数値を公表しさえしなければ悪用されないだろう！”とは楽観的に過ぎるのではないのでしょうか。結果を公表しなくても、受験産業が独自の方法で“ランク付けと輪切り”を行なうであろうこと、受験者の側も“出願校選択”のめどが立たず、受験産業依存をますます強める結果になるのは火を見るよりも明らかです。

5. では、どうすればよいのか？

このような事態を避けるために、次のような『達成度テスト』を採用したらどうでしょう。まず、1) 教科・科目の分割受験を認める。2) 高校2年次から受験出来る。3) 成績は3年間程度(?)有効とし、貯金を認める。4) 成績は受験者にもA, B, C... 5段階程度(?)の評点を通知する。5) 大学はこれを、例えば、“総合Cランク以上、数学・理科はBランク以上”などのように“受験資格”の設定に利用する。

高校2年次からテストを受験出来ることになると、一部の進学校・受験予備校などで過当な競争を煽るかも知れません。(飛び級制度の導入には利用できる。)しかし、受験者は一発勝負の選別試験を受けるのではなく、学習成果を蓄積してその達成度のテストを受けるのであるから、心理的負担は軽いのではなからうかと思えます。いずれにしても、試験を受けるのはシ

ンドイものです。多少は我慢しましょう。

ことような『成績の積上げを許すテスト』を実施するのは面倒です。データ処理も困難でしょう。しかし、立派な“大学入試センター”もあることですし、それに、これに類する試験は欧米ではすでにやられているそうです。我々には出来ないと言うことはないでしょう。

6. 二次試験はどうする？

このような『達成度テスト』が有効であるためには、国立大学を2回以上受験出来る二次試験制度の方も整備する必要があります。それについては、いよいよ、来春から『A・B日程グループ分けによる試験』をやることになりました。でもこの案はうまく行くのでしょうか？

この『A・Bグループ分け』試験制度は極めて不合理かつ矛盾に満ちており、大学側のみならず、受験生の側にも大きな混乱とフラストレーションを惹き起すことは必至と思われます。この試験では“東大・京大併願可能”という大きな目玉はあるものの、実態は旧『一期校・二期校制度』を箱根を境にねじったものに過ぎず、実質的な“受験機会の複数化”には程遠いものです。受験生が自分の志望する分野で実力に適した2校を受験するには、短時日の間に日本列島を右往左往しなければならず、その結果恩恵を受けるのは東大でも京大でも合格出来るごく限られた受験生にすぎないでしょう。

一方、大学では受験者急増（今の所、どの位増えるか全く予測不能です）を懸念して、“足切り”を導入せざるを得ず、その結果、延べ人数はともかく、実際に受験出来る人数はかえって減るでしょう。にも拘らず、大学の側でも入学辞退者の予測がつかず、受験者の志望動向を受験産業に照会しなければならない有様です。受験産業依存は受験生の上に止どまらず、まさに“大学よ！汝もか！”と言うところです。

大学側が定員の確保に非常に困るであろうことはさておいても、多数の受験生にとって不合理なのは、“第一志望校には不合格でも第二志望校に合格出来た”受験生は“第二志望校に一旦入学手続をしてしまうと、後で入学辞退しすると言っても第一志望校の『追加合格者』とな

ることが出来ないし、第一志望校で『補欠募集の再試験』があっても受験は出来ない”ことになっている点です。“どちらにも不合格だった方がかえって良かった”と言う結果になりかねない、いや、きつとなることでしょう。

受験者の皆さんに言わせると“何故そんな不合理なことになるのか？何時入学辞退しようと受験者の勝手じゃないか？”まったくおっしゃる通り。これは、偏に“それを認めると誰が入学して来るのか何時までたっても決らない”と言う大学側の都合に過ぎません。7月の自民党が空前（多分、絶後ではないでしょう）の圧勝を遂げた“衆参同日選”の選挙演説の中で中曽根首相が“どうして今まで大学改革などがうまく行かなかったか！それは大学教授などが自分の都合ばかり言っておたからです！こんなことは国民の皆さんの力を借りてどんどん改革しなければなりません！”と演説しておられたのが印象に残りました。

7. もっと良い複数化の方法はないのか？

こんな混乱を回避し、過去の『一期校・二期校制度』の弊害（それがあつたとして）も除く方法としては、次のような単純明快な『複数化法』、すなわち、全部の国公立大学の全学部が『定員を一部とっておいて、1回目の試験結果を発表してから、2回目の試験を実施する』と言う複数化しかないのではないのでしょうか。

これならば、受験生は1回目の試験の結果を見てから2回目にチャレンジ出来る。1回目の試験の“足切り”は止むをえないでしょうが、受験者は応募状況の中間集計を見て避けることが出来るでしょう。合格者の大半は2回目の試験を受験しないでしょうから、2回目の試験での足切りは不必要でしょう。

こうすると受験者は国公立大学を2回受験する機会を持つことが出来るものの、多数の受験者にとって、競争率が高くなり、志望校への合格はかえって困難となりましょう。これは辛抱願わねばなりません。2回目の試験にすべり止をかけて1回目の試験でチャレンジするか、1回目の試験でまず安全を期して2回目にチャレンジするかは全て受験者次第です。

大学側は必ず入試を2回実施しなければならず、手間が増えることになりましょう。多分、どこかの大学で“そんな面倒はいやだ”とおっしゃるでしょうから、この点がこのやり方の実現へのもっとも大きい障害となりましょう。しかし、大学入試の過当競争が大きな社会問題となっている今日（これには多分に誇張されている面があるように感じられますが）大学だけが免責と言うわけには行かないでしょう。

8. 最後に念のために

繰り返しますが、入試制度をいじくり廻しても本当の問題解決にはなりません。現在いわれ

ている“入学しにくく、卒業し易い制度”を改めることが緊急かつ重要です。大学の入口を十分に整備・拡充し、なるべく選別試験なしで多数の若者にチャンスを与え、入学者を十分に教育・指導して、卒業にはバリエーションをおくといった態勢を確立することが必要です。国大協においても文部省においても、“9月入学にすれば国際化出来る”などと言った末梢的な“外見だけの制度いじり”に明け暮れせずに、欧米諸国にならって“入学し易く、卒業しにくい大学教育態勢を整えるにはどうするか”と言った論議を急ぐべきであります。